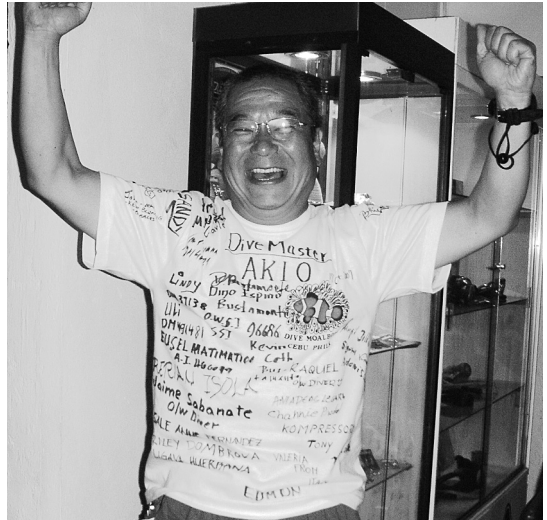


第3の人生、「ダイビング」

International SCUBA Peasant (ISP)
 [国際・ドン(鈍)百姓・ダイバー] 伊原 昭男



1993年から3年間半、(旧)KDDから出向し、TTCの国際部長としてお世話になりました。

今般、(まじめな、お堅い、技術屋さん達の)季刊誌「TTCレポート」に投稿せよ、ということで多少戸惑っていますが、「息抜き」のコーナーとして気軽に読んでいただくために寄稿させていただきます。

TTCではジュネーブのITU(国際電気通信連合)や他国の国内標準機関との調整、特に電気通信業界のIPR(知的財産権)に関する国際ルール作りや私的標準化フォーラム活動に関する調査などをさせていただきました。中でも、米国カリフォルニアのスタンフォード大学で、大学院の学生に向けて日本の電気通信の標準化動向について90分の講義をしたことは忘れられません。

TTCの後、電気通信業界の自由化・合従連衡の渦中で、勤め先の吸収合併や転職を経験しましたが、考えるところがあって2005年「宮仕え」を辞めました。55歳半の時でした。

サラリーマン最後の夜は今でもよく覚えています。とにかく『自由』を得たことが嬉しくて、電車の最寄り駅を乗り越してしまい、やっと自宅に帰ってサラリーマンの象徴「黒い革靴」をゴミ箱に投げ捨てました。居間から妻・子供たちの、「ご苦労様でした」、「ありがとう」の声が迎えてくれました。そして、翌日はサラリーマン頭を「丸坊主」にし、さらに2日後には昔の古巣、ジュネーブの空港に立っていました。

こんな全身高揚感の中で「第3」の人生を開始しま

した。(退職以降を「おまけ」のように「第2の人生」と呼ぶ人が多いが、私は、第1を学生まで、第2を宮仕え、そして第3を『自由と歓喜』の人生と捉えています。)

「第3」の人生をスタートして1年半後、57歳の時に、残る「体力」を振り絞って念願の国際ライセンス「Divemaster」を取得し、ダイビングの「プロ」の資格を取りました。これ以降、毎年2回、それぞれ約2ヶ月間ずつ、年間約4ヶ月間を南方フィリピンのセブ島の『僕の村』(*)で、大好きな「ダイビング」と関わり合いながら過ごしています。((*)：地名は申しあげません、『僕の村』とだけ言います。昔、スイスの素晴らしいスキーの穴場情報をマスコミ関係者に喋ったら、日本人がドツと押し寄せて来て酷い目に合ったことがあります。『僕の村』に興味がある方は個別にお問い合わせください。心が狭くてごめんなさい。) (日本に居る間は、千葉県田舎で、自然に囲まれて「ドン百姓」をやっています)

『僕の村』には既に13回訪問したので、毎回2ヶ月間の滞在とすると、今までに通算2年間以上も「住んでいる」勘定です。現地では、ほとんど毎日、日本の友人やヨーロッパのお客様(米国人は、厳しい競争社会にあって長期の休みが取れないので、ほとんど来ません。)と潜っています。治安が良くて、人々が素朴でフレンドリーで、物価が安くて、澄み切った海、そんな環境に囲まれて毎日毎日潜っています。

ダイビング以外では、地元の小学校で妹と「クリ

スマス・コンサート」を開いたり、日本の小学生達が使った鍵盤ハーモニカやリコーダーを大量に寄付したり、それを使って地元の小学生達が演奏するミニ・コンサートを友達と開いたりしています。クリスマス・コンサートでは、地元の子供達とその父兄、さらに市役所や教育委員会関係者など、約1000人もの観客が小学校の屋外ステージに集まりました。

日本からの身体障害者達のダイビング・プロジェクトを指揮したこともあります。腰から下が全く動かないなどのハンディを負った人々9名が、体重がなくなる「海中」では自分で自由に動き回ることができるの



鍵盤ハーモニカの練習

「音楽」の授業がない『僕の村』の小学校では、子供たちは、日本の小学生達が使った「お古」の鍵盤ハーモニカを大事に大事に、そして真剣に練習する。



身障者もこのとおり

体重がなくなる海中では、下半身不随の身障者も、自分の力でスポーツができる。

です。プロジェクトのリーダを任された僕自身、それを見て感激し、「ダイビングは、なんと人に『優しい』スポーツなのか！」と再認識しました。(皆さん、耳の聞こえない人たちは海中でもお話ができることをご存知ですか? 「手話」です。地上のハンディが海中ではアドバンテージになる事実を目の当たりにした時には涙が出ました。「神様、あなたは何て素晴らしいのでしょ!!」と。)

滞在中、最低1回はお礼の意味を含め、35kgもある「豚の丸焼き」パーティを開いて地元の仲間とその家族たち(約60人)を招待しています。

お陰様で、第10回目の訪問では、『僕の村』の教育委員会委員長および小学校校長の連名で「表彰状」をいただきました。すべて、ただただ、無心で始めたことですが、フィリピン社会に受け入れてもらい、何かの役に立って感謝されていることが嬉しいです。

以下に『僕の村』での生活の断片を紹介する意味で、Divemasterを取得した時のエピソードと最近(第13回目)の滞在備忘録を紹介させていただきます。両方とも帰国して日本の友達に送った帰国メールからの抜粋です。

【やったぜ、ダイブマスター】(2007年12月)

ついに、憧れの「Divemaster」になったよ!!

フィリピン、セブ島の片田舎、ヨーロッパ人リゾート『僕の村』で、プロの国際ライセンスを取った。

毎日毎日潜り続けた集中特訓の60本目を終え、正にボートに上がろうとした最後の瞬間のことだ。

長い間、厳しく指導してきてくれた、先生・ディノが僕に握手を求めながらプレートを水の中で渡してくれた。そこにはDinoの字で「Conglaturation!! "Divemaster AKIO"」と書いてあった。これには感激した。そばにいたダイバーからも次々握手を求められ、皆で何度も水中記念撮影をした。

その直後だった。一生忘れないであろう、あの「感激」が始まった。水中で、ディノが僕に、サインを送ってきたのだ。「YOU」、「WATCH」、「ME」、と。Divemasterの厳しい訓練中に、何百回となく繰り返し使った、あの「世界共通サイン」だ。僕は、「最後に、何を見せてくれるのかな?」と期待して「OK」サインを返し、腕を組んでディノを見た。

するとディノは、いきなり自分のマスクを外し、器材も、レギュレータも、全てを外して放り出したの

だ。さらに、両手を広げ、「さあ、どうする？」と言わんばかりに、私の前に仁王立ちになったではないか。「えっ！なに！ディノ！お前、気が狂ったのか！自殺する気か！！」想像だにできなかった状況に、とにかく彼に突進し、僕の補助レギュレーターを彼の口に押し込んだ。

ディノは、僕の補助レギュレーターから大きく2呼吸すると、今度はそれまでをも捨てた。「ディノ!!、お前、いったい、何をやる気だ!! 死にたいのか!!」すると、ディノは、次のサインを出した。「YOU、GIVE、ME、お前の(くわえている)レギュレーターだ。」と。「そうっか、高級テクニクをやるんだな」と瞬時に判ったので、自分のくわえているレギュレーターから大きく空気を吸ったあと、それを彼の口に押し込んだ。彼はOKサインを出した。

それから、「プロ」の大パーフォーマンを始めたのだ。周りの大勢のダイバーが、皆びっくりして見守っているのが分かる。透明度40~50m、スコーンと抜けた、透き通った水の中、珊瑚礁の上で、ダイブマスターとしての「プロのスキル」を冷静にディノと総合実演したのだ。

1本のレギュレーターだけを、二人で交互に呼吸しながら、ディノの「指令」が次々に飛んで来る。「お前のマスクをよこせ。」早速、自分のマスクを外し、彼につける。もはや、僕の視界はほとんど見えない。塩水が目に入って痛いですがすぐに慣れる。そばにいるディノがおぼろげに見えるだけだ。「お前の器材をよこせ。」僕は自分の器材のリリース(止め具)を手探りで外し、左の腕から抜いて、右側から外して彼に渡す。この動作にも順番がある。反射的にできるまで訓練で叩き込まれた手順だ。彼はそれを受け取り、自分の身体に装着する。

「右に移動しよう。」「止まれ。次は、左だ。」「今度は上に上がるぞ。」「よし、下がるれ。」

二人は潮に流されて散り散りにならないように、互いに相手の胴のベルトを左手でしっかり握り合ったまま、右に左に、そして上に下に移動する。残った右手一つで、サインを出しレギュレーター交換を続けるのだ。

最後にディノが僕に器材を返してくる。僕はそれを受け取り、手探りで、かつ反射的に、まずは右腕を、次に左腕を通して装着し、ロックをかける。そして、異常がないか、ホースが絡まっていないか、手探りでチェックする。次にディノは、マスクを返してくる。僕はそれを受け取り、頭を入れ、上を向いて鼻から息

を出し、マスクの中に空気を入れてクリアにする。やっと、視界が戻り、くっきりと見える。

この間、ずっと、ずっと、レギュレーターは1個だけ、操作はすべて右手一本だ。

とにかく、リズムカルに、二人で交互に呼吸を続けなければならない。二人ともマスクを外しているの、ほとんど周りがみえない。途中で水を飲もうが動作を続行する。パニックを起こせば、相手も事故に巻き込んでしまう。むせようが、何しようが、とにかくリズム通りに、二人は呼吸を続ける。

ディノも命がけた、弟子の力量を信頼できなければ、自分も巻き添えを食らう。後でディノから聞いたが、この総合パフォーマンスは完璧なダイブマスター卒業生にしかしない、僕は3人目だと言う。

見えない視界でも、他のダイバー達が周りで見ている「気配」だけは感じられる。(実際には、よそのショップのガイドやお客さん達も、皆が見ていたようだ。)いままでの訓練の集大成とも言うべき、プロとしての総合パフォーマンスであった。気がつく、ディノの手が目の前に伸びていて、両手で堅い祝福をしてくれた。続いて、他のダイブマスターやお客さんまでもが、次々と握手を求めて「プロ」のスキルを称賛してくれた。今思っても、一生忘れることのない、印象深い、感激のパフォーマンスであった。

パフォーマンスが終わって、僕は水中でホバーリング(水中に漂い続けること)しながら、パフォーマンス直後の、アドレナリンが開放しの「高揚感」と、パニックを起こすことなく冷静に対処できた「充実感」・「満足感」とに酔いしれ、この長い集中特訓の余韻に浸りながら、潮に身を任せた。

全員がボートに上がったのを確認し、最後にボートに上がると、みんなから拍手が返ってきた。夕方は、大祝賀会になった。パーティの席で、ディノが来て僕に聞いた、

「ミスター、ダイブマスター、どんな気分だ？」

僕は答えた、「仲間に入れてとても嬉しい、ありがとう。これで、きみが怖くなくなったよ」と。彼は大声を上げて笑った。

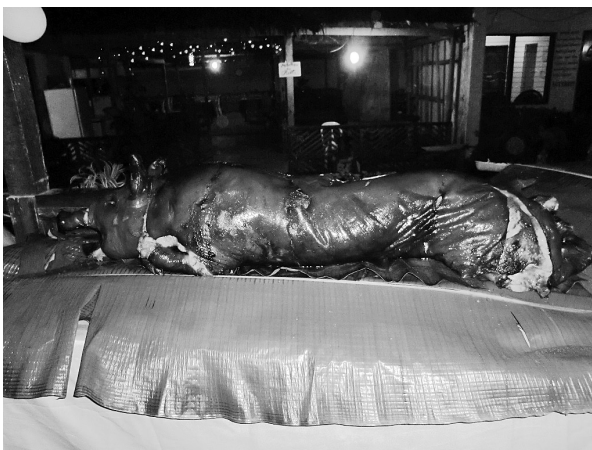
【第13回目、『僕の村』から帰国した。】

(2012年4月)

2ヶ月ぶりに、セブの『僕の村』から帰国した。早速、日本の「寒さ」にやられて喉が痛いけど、桜の満開に

は間に合ったし、花粉症は終わっていて気分は最高だ。

帰国直前、『僕の村』で友達と、恒例の「フェアウェル・パーティー」を開いた。ショップ仲間スタッフと、その家族（『僕の村』では子供を含めたスタッフ仲間の家族みんなが仲間だ）と、さらにヨーロッパ（大勢のドイツ人の他、スイス・ベルギー・ルクセンブルク・ラトビア・英国等）からの長期滞在者達、65名を招き、35kgの「豚の丸焼き」（レッチョン・バボイ）の他、様々な料理を出した。余興として地元の子供達のミニコンサートをしたり、参加者全員で武満徹作曲の「小さな空」を合唱した。美しい調べは世界共通だ。最後の合唱では、近所の子供たちまで大勢が加わり、80名以上の大合唱になった。会場（とあるバー）の外の通路には、何の催しだろうと多くの人々が立ち止った。「小さな空」は、みんなが歌詞（ローマ字の日本語と英語）を欲しがり、コピーしたものが全てなくなった。



35kgの豚の丸焼き

『僕の村』のパーティの花形は何と言っても「豚の丸焼き」だ。丸焼きの限界重量、35kgともなると、焼き上げるのに丸1日もかかる。

『僕の村』は今回で13回目、しかも毎回2ヶ月間ともなると、もはや「ダイビング好きの旅行者」と言った感覚はなく、そんなリゾート気分は微塵もない。フィリピンの、小さな島の、もっともっと小さな『僕の村』で、ちっちゃな「私的な国際交流」をやっている、そんな気分だ。日本からの友達が居ない時は、ヨーロッパのお客さんを徹底的に指導して悪い「癖」を直したり、ダイビングのマナーを叩き込んだりしている。

普段は、「頼まれて」、海中ガイドをやっていて地元の仲間には結構「頼り」にされているが、ダイビング以外でも、下手に3ヶ国語をしゃべるせいか、「AKIO

はインテリだ(?)」と思われているらしく、様々な人生相談や頼みごとの相談が増えてきた。今回の「究め付け」は、ある若い新婚同僚の奥さんが「自殺未遂」をした、その日の内に身内から僕のところへ相談が来た。

「自殺」なんて無縁の社会と置いていたが、いろいろ文明が進み、便利で裕福な社会になり、貧富の差が生まれて人間関係が複雑になって来た。そんな中で、昔からの、素朴でみんなが助け合う、素晴らしい「慣習」が、「便利さ・裕福さ」に押されて摩擦が生じ、社会的「歪」を起こし始めている。自然がいっぱいで、大好きな『僕の村』にまで、とうとう、「うつ病」が忍び寄って来たのだ。

「便利さ・裕福さは、決して『幸せ』ではないよ。」といつも言っている。『僕の村』のみんなに、「ここは、日本よりずっと『幸せ』なんだよ。」と心から言っているのに……残念だ。ストレス、精神的重圧、心労、……これに孤独と周囲の無理解が加わり、……さらに精神的病いに対する無知もあって、文明国の「落とし穴」、「魔の手」が忍び寄る、……嘆かわしいことだ。どんなにスペインやカトリックの文明に征服されても、さらにはアメリカや日本に占領されても、しごとくフィリピンの固有の慣習と文化を残してきたように、これからも遅くフィリピンの良さを守り抜いてもらいたいと思っている。

ところで、今回のダイビングでは、ジンベイザメに、5回のダイブで延べ9匹に会った。（体長は4m～8mで様々）また、野生のウミガメには1ダイブで13匹に出会ったこともあった。（僕のウミガメとの遭遇記録は14匹／ダイブだが、仲間の最高記録は22匹／ダイブだからまだまだだ。）

海の中は神秘だらけだ。

「うなぎ」の生態も分からないことだらけだけど、「ジンベイザメ」も分からないことばかりなんだよ。そんな中でも、最近徐々に分かってきたことは、……人間の目に触れるジンベイザメは体長2.5m「以上」のものばかりだけど、それより小さい50cm～2.5mまでの赤ちゃんジンベイザメは水深1,000m以上の真っ暗な「深海」で育っているらしいということ。確かに、ジンベイザメは2.5m以上のものしか見ないから、赤ちゃんは2.5mくらいで生まれるのかと思っていたけど、それは間違いらしい。うなぎの稚魚も、1,000m以上の真っ暗な深海で育つらしい。あんなに大きな大人のジンベイザメをちっぽけな水族館に閉じ込めるなんぞ、日本人は頭がおかしいんじゃないか？これに



野生の海亀と

野生でも、亀の習性・性格を理解してあげると、この通り逃げたりしない。絶対に、握ったり、押さえてはいけなく、「自由」を奪ってははいけなく。このままスピンをして、海亀と僕は3分間ワルツを踊ったのです。

は地元の仲間はみんな真剣に怒っている。

潜っていていつも思うのは、「生物って、どれも『生きられる限界』ギリギリの環境の中で必死に生きていく」ってこと。環境のチョットの変化で滅びるものもいれば、生き残るにはその変化に適応する何らかの「術」を備えているってことだ。人間だけじゃあーないかなあ?? 気温-50度~+50度まで生きていられるのは。それも、防寒具を開発し、「空調」なる文明機器を発明してね。でもね、そのために、地球資源をバンバン使いまくっているんだよ。

この世の中に「地球に悪さをする動物はいない」そう。ただ例外が一つ、それは「人間」だ。日本は、「鯨の生態調査」なんて言って、国を挙げて鯨を殺しまくっている、こんな馬鹿げた調査があるか!! 絶滅寸前の鯨を、どんなヘリクツを垂れたところで、殺すことはないだろう!?!

コントロールできない、燃えカスを捨てることもできない、そんな馬鹿げた原発を造ってきたのも人間だ、便利さ・裕福さを求めて。いつか言ったけど、「計画停電」何でいけないの? 突然じゃあなくて、「計画」だよ!! 『僕の村』ではしょっちゅうだよ。夜はみんな道端に椅子を出してろうそくを囲み、生ぬるいビールの飲みながら、お月様を見上げて談笑する、いいじゃないのよ。一方的に送られて来る、つまらないバカテレビを見て時間を潰すより、みんなとお話ができてずっと素晴らしいと思うなあ。

さて、アフター・ダイブでは、僕が時々さばく刺身が、

今回も大人気だった。「マグロ」3回、「ブリ」3回、「かつお」1回、いつも「ワサビ」を添えてビールのつまみに提供する。どの魚も、夕方、地元のフィッシャーマンが、その日の収穫物を売りに来るから「新鮮そのもの」だ。(問題は、常にマグロが手に入らないこと。その日に収穫したものだけを売りに来る、なんと素晴らしい社会ではないか。) フィッシャーマンにとって、今や僕は「大のお得意さま」だから、ショップに居ないと僕のコテージまで御用聞きに来てくれる。ドイツの高校で化学を教えていた69歳のおばあちゃん、ベアッテは、「私は魚アレルギーがあるけど、…」と言いつつ、「Akioの作った刺身だけは食べても平気なの。」と、皆に宣伝しつつ、自分でもパクパク食べてくれるから嬉しい。その他、僕のコテージのベランダでも夕食会を4・5回開き、煮魚やカレーライスを作って招待したりしていると、毎日が結構忙しい。

隣のショップのボートマンで「ふぐ」の調理人、アベヨックに頼んで「ふぐのココナツミルク鍋」を作ってもらい、「ふぐパーティ」も2回開催した。こればかりは、ヨーロッパ人は怖がって食べないので、日本の友達と地元スタッフだけを招くことにしている。これがマジ、本当に、本当に美味しいのだ。ふぐは4kgもある、超でかい、天然のふぐだ。

さて、次回、第14回目の『僕の村』は、「10月中旬過ぎ~クリスマス直前」までを考えています。体重がなくなる海中の、人に優しいスポーツ、3次元の「空間散歩」をしながら、純粋素朴な人々と仲良くしませんか? 生きた珊瑚、美しい魚の豊富さ、澄み切った透明度、どれを取っても、今思うに、「昔夢中になって通った、あの沖縄・宮古島の海は何だったんだろう」という気がしてならない。

まだ『僕の村』にいらっしゃってない方も、僕が滞在している間に是非いらしてください。

「息抜き」に読んでいただき、ありがとうございます。

お仕事にお戻りください。

海中のNaturalist、 Akio